

ウルシ樹の生育調査

— ウルシの里構想実現に向けて —

中野 徹 夫

I はじめに

輪島塗（漆器）は世界に誇る伝統工芸産業であり、この漆器を仕上げるのに多くのウルシが必要である。輪島漆器に使用されるウルシは総量にして年間約30t（平成6年）で、このうち90%以上が中国を主とする外国から輸入している。しかし、最後の仕上げには良質な日本産のウルシが必要であり、年間2～3t（平成6年）の日本産ウルシが使用されている。この日本産のウルシは岩手県を初めとする東北地方、新潟県、茨城県等から移入しており、地元石川県では現在ほとんど生産していない。

漆器業界や地域の古老に聞くと、戦前は勿論のこと戦後も昭和30年頃までは石川県内でかなりの生産があったとのことである。

石川県でのウルシ生産がなぜ行われなくなったのか、理由は定かではないが、輪島漆器に使用する日本産ウルシのほとんどを県外に依存することは決して賢明な方策ではない。そのため、昭和40年代後半から今日まで補助事業等によって輪島市にウルシ林の造成（約13万本植栽）がなされてきた。また、昭和61年にはウルシ林の造成をより一層促進するため、ウルシの里構想が策定された。しかしそれ相応の成果は上がっていない。

そこで、これまでのウルシ樹の植栽地を調査し、不成功に終わった原因を追求した。事業を成功させるためには、過去の不成功の原因を明らかにし、その反省の上に立って進める必要があるからである。

この調査は平成8・9年の2年にわたって実施したものであるが平成9年度の現地調査は輪島森林部林業振興課の職員と協力して実施した。なお、上島元輪島林業事務所長、一布輪島森林組合参事、隅漆器組合事務局長、上梶輪島市秘書室次長にはウルシ栽培についての過去の経緯等を聞かせていただき、久保宝二氏には植栽地の案内等について、色々とお世話になったことを感謝申し上げます。

II 調査方法

輪島市におけるウルシ樹の植栽は大別して二つの方法で実施してきた。一つは国・県の補助事業を輪島漆器商工業協同組合（以下漆器組合）が事業主体となり、昭和46年から61年にかけて本数約10万5千本、面積にして約100haを実施したものである。いま一つは昭和59年から平成8年にかけて、個人が主体となって植栽したもので人数にして125人、本数にして27,000本である。この個人の植栽については輪島市と漆器組合からウルシ樹の苗木が無償で配布された。漆器組合及び個人が主体となって植栽したものについて、輪島市役所が保管していた一覧表をもらい受け、それに基づいて次の調査を実施した。

また、ウルシ樹の栽培に関して、地域の古老や掻工経験者から話を聞いた。

1 聞き取り調査

個人が主体となって植栽したものについては、昭和59年から平成4年までに植栽した90人に対し、植栽場所、生育状況等について電話で聞き取りした。漆器組合が事業主体となって植栽したものについても関係者から聞き取りした。

2 現地調査

個人が主体となって植栽したものについても、漆器組合が事業主体で植栽したものについても、聞き取り調査の結果をほぼ確認できる程度の調査をした。

II 調査結果と考察

1 個人が主体となって植栽したもの

聞き取り調査の結果は表-1のとおりである。休耕田については、大部分枯損と全部枯損が多く、これらを合わせると全体の61%となる。次に生育の良が2件、中が9件あるが、これらは畦畔部における生育状況である。植栽は本地部も含めて行ったのであるが本地部では枯損したか、また生存し

表1 聞き取り調査の結果

生育状況	植栽場所毎の件数			
	休耕田	畑地	山地	埋立地
良	2(畦畔)	2(周囲)	2(斜面下部)	
中	9(畦畔)	3	2()	
不良	2	2	2(斜面中部)	
大部分枯損、一部生存	16	11	5	
全部枯損	9	3	3(斜面上部)	2
杉に被圧されて枯損	1	2		
不明	2		2	
計	41	23	16	2

ていても畦畔部より生育が劣るとのことであった。現地調査の結果(後述)もそのとおりであった。杉に被圧されて枯損したものが1件あるが、これはウルシ樹の初期の生育が思わしくなかったため、ウルシ樹の間にスギを植えたところ、スギの生育が良好となりウルシ樹を被圧して枯損させたものである(畑地についても同様)。この様に休耕田に枯損が多いのは、稲作を止めて1~2年後に植えたものが多く、また排水の工夫も十分にしていないので、根が健全に育たなかったためであろう。

畑地についても、大部分枯損と全部枯損が多く、両者を合わせると全体の61%となる。畑地の場合は土壌の不良な所に植えたことや家(住居)から遠い所を選んで植えたこともあって、その後の管理を十分しなかったため、枯損が多いのである。

山地については、斜面下部における生育が良好で、上部に進むにつれて、不良や枯損が多くなるのは当然の理であり、これは現地調査で何度も確認したことである。Bc型土壌に植栽したものは最初の2~3年は生育の不良な状態で生存しているが、その後は年月の経過に伴いほとんど枯損していくのである。

埋立地の枯損は、理学的にも化学的にもウルシ樹の生育に不適な場所に植えたためである。また、休耕田と山地に不明が2件ずつあるが、これらは植栽後1~2年は現地に行って下刈りをしたがそれ以降は全く行っていない、というものであり、恐らく正常な生育はみられないであろう。

このようにすべての植栽地において生育の良好なものが少なく、かつ枯損が多いのは、ウルシ樹に適した植栽地が少なくなっていることもあるが、植栽に当たって適地を十分に選定しなかったことに加え、休耕田の十分な排水処理をしなかった

こと、植栽後の管理が十分でなかったことが大きく影響している。また、聞き取り調査でウルシ樹は強風に弱い、との指摘があったが、強風はウルシ樹のみならず林木すべてに悪影響をもたらすも、現地調査から特にウルシ樹には影響が大きいように感じた。

次に現地調査から、休耕田に植えたもので比較的成功したと思われるもの2箇所を選び、畦畔部と本地部における生育状況について調査した結果を表2に示す。三井町中、市ノ坂調査地とも畦畔部の生育が良好であり、有意差検定したところ、1%水準で有意差が認められた。両調査地とも昭和60年まで稲作し、61年は休耕、62年の秋にウルシ樹を植栽したのである。水田の水切りはしても1~2年の休耕では、土壌中に密度が高くて水を透しにくい層(以下不透水層)も残っており、酸化が十分進んでいないので、本地部では根が正常に生育できず枯損や生育の遅れが生じたのであろう。一方、畦畔部では元々、本地部ほど土壌は還元されていないし、畦畔斜面から酸素の供給も受けられるので相応の生育がみられたのである(写真-1)。

表2 休耕田の畦畔と本地における生育状況(胸高直径)

区分 調査地	畦畔	本地	備考
中	10.8cm	7.6cm	畦畔、本地とも23本の平均
市ノ坂	8.2	5.4	畦畔、本地とも13本の平均

注1) 両調査地とも畦畔と本地の間には1%水準で有意差あり

注2) 両調査地とも植栽は昭和62年秋、測定は平成8年11月



写真-1 ウルシ樹の生育

畦畔に植えたウルシ樹は相応の生育が見られるも、本地に植えたウルシ樹は枯損したものや生育の不良なものが多い。



写真-2 本地の土壤断面

休耕して数年経過したもので、不透水層の部分が酸化されて赤褐色を呈している。

平成8年に中調査地の土壤断面を調べたところ、本地部には地上部から約15~20cm下部に赤褐色の層が認められた(写真-2)。この層は以前は還元された不透水層であり、青灰色を呈していたと推察するが、休耕後はそこに集積していた鉄分やマンガンが酸化して赤褐色を呈しているのである。この赤褐色の層は2cm程度の不透水層の部分だけに限られる場合と、不透水層を含めてその下部10cm以上にも及ぶ場合がある。一般に山田では赤褐色の層は厚くなるようである。休耕してから何年後に不透水層が酸化状態に移行するかは、現地の状況や水切りの仕方などによって異なるので一概には言えない。そのため、ウルシ樹を休耕田に植栽する場合は、水切りをした後、不透水層の酸化を一つの基準にすれば枯損はさげられ、植栽後の生育もかなり期待できるものと思う。

次に、三井町与呂見の山地におけるウルシ樹植栽地の生育状況を表-3に示す。高低差20m程度のゆるやかな凸型を示す地形であり、麓はB_{ℓD}型(黒色)土壤の上にB_D型土壤が覆いかぶさった良好な土壤であるが、中腹部にはB_D^(d)型の土壤が出現し、なだらかな尾根部にはB_C型土壤が出現する。平成元年春に植栽したので9生長期を経過しているが、生育の差は歴然としている。尾根部のB_C型土壤では、最初植栽したものが数年

表-3 山地における生育状況(胸高直径)

斜面下部及び麓 (B _{ℓD} +B _D 型)	中腹部 (B _D ~B _D ^(d) 型)	尾根部 (B _C 型)
11.7cm	5.1cm	全部枯損

注) 植栽は平成元年春、測定は平成9年11月(12本の平均)

後に枯れ、その後補植したものが枯死している。

2 漆器組合が事業主体で植栽したもの

事業は昭和46年から61年まで行われ、面積にして100ha、本数にして10万5千本である。関係者からの聞き取り調査の結果は、「一部は成功したものの、大部分が失敗に帰した。」とのことであった。植栽面積を年度別にみると少ない年は4ha、多い年は10haである。また、ウルシ樹を植栽した一団地の面積は、小さいものが0.2ha程度、大きいものは数haである。これらのうちから成功した例と不成功に終わった例に分けて述べる。成功したというのは植栽後10~15年に採液できる程度(胸高直径 約10cm)に成長し、かつ一度は採液されたものを対象にした。

(1) 成功した例

(イ) 山間の段々畑とその畑に接する山の斜面に植栽したもので面積は小さいものが0.2ha程度、大きいものは2ha程度である。ただし面積の大きいものは斜面の上部では生育が落ちており、その部分については成功したとは言えない。これらは植栽後10~15年に一度採液したが、それ以降は萌芽枝が発生するも、間に杉を植えたため、杉に圧迫されて現在は健全に育っていないもの、また杉やアテ等の造林木は植えていないが、下刈り等の管理を十分にしなかったため灌木やカヤに覆われてウルシ樹の姿が見えないものが多い。

(ロ) 棚田の周囲(畦畔)のみに植えたもので、ほぼ順調な生育がみられ、一度採液したが、その後は栽培を中止している。

(ハ) 約2haの広葉樹林(1つの斜面)を伐採してウルシを植栽したもので、斜面の中腹以下ではB_D(一部B_E)型土壤が出現しており良好な生育を示した。ただし、斜面上部ではB_D^(d)~B_C型土壤が出現しており、生育は良好でなくB_C型土壤では枯損もみられた。植栽後、一度採液(養生搔き)したあと、ウルシ樹を残したまま、林業公社に移管し、アテを植栽した。そのため、現在はウルシ樹とアテが混交状態で成林しているが、アテの勢いが強くウルシ樹を圧迫する状況にあるので、このまま進めばやがてウルシ樹は消滅すると思われる。なお土壤の特に良好な部分のウルシ樹は生育も良好であったため公社に移管後に二度目の採液をした。このウルシ樹の植栽地はかなりの傾斜を有しているが、栽培者の行き届いた管理が

成功につながった大きな要因である。

(2) 不成功の例

(イ) 段々畑(0.3ha程度)に植栽したもので、土壌的にはほとんど問題はないが、植栽地は海岸に近く、強い海風を受けたため、成木しなかった。現在は辛うじて生き残っている貧弱なもの数本を認める程度である。

これは強風がウルシの生育に悪影響を及ぼした例である。

(ロ) 戦後、傾斜のゆるやかな丘陵地を開墾(国営)して、農耕地として利用していたが、農作物の生育も思わしくなかったため、農作を止めてウルシ樹を植栽したものである。土壌は黄褐色を呈して有機物は少なく、理学的にも化学的にもウルシ樹の生育は不適である。現在はススキや灌木に覆われておりウルシ樹の姿は認められない。

ウルシ樹はキリと共に樹木のうちで最も良好な土壌環境を好むものであるが、この認識がないまま、痩せた開墾地に植えて失敗したものであり、当然の結果と言えよう。この失敗の原因の背景には、指導的立場(行政)にある人がウルシ樹の植栽適地を十分認識していなかったこともある。

(ハ) 休耕田の本地に植栽したもので多くが枯損した。生き残ったものもあるが、それらは極くわずかであり、生育も貧弱であった。ただし、畦畔に植栽したものは生育の良好なものが多くみられた。

現地を調べたところ、排水が不良で過湿なものが多かった。恐らく休耕田にしてから、排水条件の改善を十分にしないまま植えたのであろう。

(ニ) 斜面の中腹から下部に数ha単位で植えたもので、土壌的にはウルシの生育が期待できる所である。しかし傾斜が急なことと例年積雪が1~2mあることから、ウルシ樹は倒伏し、木(雪)起しを何回か実施したが、根切れが生じることなどからウルシ樹は次第に枯損して行った。残ったものも十分な保育(年1回の下刈りのみ)がなされなかったため、健全な生育がみられず、現在は雑木林の中にわずかに姿をとどめる程度である。傾斜が急で、積雪の深い所では、雪の移動圧を防止する階段などを設けない限り、他の条件がウルシ樹の生育に適していても、健全な生育は困難と言えよう。

(ホ) 2~数haに及ぶ広葉樹林を団地状に皆伐して植栽したものである。昭和50年頃スギ、アテ

の拡大造林が盛んに行われたが、これに類似した方法で実施したのである。実施に当たって土壌調査等をしなかったため、これらの団地にはウルシの不適地が多かったことと、下刈り等の保育の不行届が大きく影響して健全に生育しなかった。そのため、植栽地がその後林業公社に移管され、現在はスギ、アテの林に変わっているものもある。傾斜の比較的ゆるい団地ではスギの間に生き残っているウルシがわずかに認められる。漆器組合から下刈りを委託された輪島森林組合の話によると、植栽地における草や灌木の繁茂が著しいので、年2回の下刈りの必要を申し入れたが、予算の都合で1回しか認められなかった、とのことである。

ウルシの健全な生育には、土壌環境、光環境の良好なことが第1の条件であるが、積雪の少ないこと、急傾斜でないことも大事な条件である。一方、2~数haの団地にあっては、ウルシの生育に適した土壌もあるが、適しない土壌もある。むしろ、一般には適しない土壌の方が多いのである。また光環境、積雪や傾斜の条件を考慮すると、土壌的には良好でも植栽(生育)できる範囲はずっと狭まるはずである。加えて林地は、田畑や畦畔に比ぶべくもないほどの雑草や灌木が繁茂するのであり、この傾向は土壌の良好な所ほど強くなるのである。事前の適地調査をしないまま団地を設定し、植栽後の保育は年1回の下刈りだけであったことを考えると、ウルシ樹の育成が不成功に終わったことはむしろ当然とさえ思えるのである。

以上、個人が植栽したもの、事業で植栽したものについて聞き取り調査と現地調査を通じて、成功したものと不成功に終わったものをみてきた。ウルシ樹の生育には、土壌が肥沃で排水が良好なこと、それに日当たりの良好なことが最大の条件であり、また急斜地で積雪の深い所は生育するには困難であることが改めて認識させられた。またB_cC型土壌のような半乾性の土壌の場合、スギを植えると、成長は衰えるも枯死するようなことはめったにない。しかし、ウルシは最初はやや成長するが、3~4年経過すると枯死が目立ち始めるのである。このことから、ウルシはスギ以上に土壌に対する要求度が高いことがわかる。

3 ウルシ樹の栽培が衰退した理由

この調査を進めながら、掻工経験者や地域の高齢者からいろいろと話を聞かせていただいた。そ

の話から、今日ウルシ栽培が行われなくなった理由を考察してみる。

昔は畑や屋敷の周囲はもとより、田の畦畔、山すそ、河川の土手斜面等にもウルシ樹は植えられていた。いわゆる小団地集約型（適地だけ）の植栽である。これらのウルシ樹は直径10cm程度になると、一本当たりいくらかで掻工に売り渡された。農産物以外にさして収入のなかった時代であるから、ウルシ樹の栽培は農家にとって割の良い副収入源になったのである。また、掻いたあと立木を伐採すると自然に萌芽更新が行われるので農家にとっては好都合であった。また、当時は掻工も多く、一つの集落に数人～10数人の掻工がいた集落がいくつもあった。そして「ウルシ成金」と言われたほどウルシが高価に取り引きされたので、掻工は相当良い値で農家からウルシ樹を購入したのである。

また、これは蛇足であるが、その頃の輪島町や門前町に在住の掻工は県内だけでなく、遠く関東や東北方面までもウルシ掻きに出稼ぎしたのである。例えば門前町広岡集落は36軒中34軒までウルシ掻きをしていたので大半が出稼ぎ経験者であった。鍋と釜を持ち6月～10月初めまで農家の離れを借り、自炊しながらウルシ液を採取したのである（若岡邦太郎談：明治43年生）。

ところが、昭和30年代中葉からの高度経済成長の波が能登にも押し寄せて賃金や物価を高騰させ、農村の過疎化を促しはじめた。そのため、掻工にとっても今まで以上の高収入が必要となるのでウルシの採液は今まで以上に集約的に出来る状況が必要となったのである。しかし、農村（家）における過疎化の進行に伴って、ウルシ樹の栽培は疎放になりはじめたのである。これは能登だけでなく全国的な傾向であった。

加えて中国からの安いウルシの輸入は、日本産ウルシの価格の上昇を抑制した。そのため掻工は今まで採液に回っていた集落でも条件の不利な所はウルシ樹の購入を控え、有利な所だけを回るようになった。その場合でも、農家から購入するウルシ樹一本当たりの価格はあまり変わらなかった。そのため農家は割りに合わなくなったウルシ樹の栽培に力を入れなくなり、この悪循環がくり返されて今日に至ったのである。

今一つ、これまでウルシが入手困難になると、漆器業界、行政等からの働きかけで、ウルシ樹の

植栽奨励、掻工確保対策、技術研修が行われたが、ウルシの入手が容易になると、これらのことは顧みられなくなった。栽培者はこのような業界や行政の都合主義にむなしさを感じていた。このことが植栽に当たって適地の確認を怠り、手入れ不足を招いた要因の一つであることも否めないと思う。

IV 今後の方向

1 ウルシ樹の栽培について

国産ウルシは外国産ウルシに比べて価格は数倍するが、塗りに際してはよく伸び、透明度が高く艶がある。かつ、国産ウルシを使った製品は堅牢で長持ちすると言われている。そのため輪島漆器は仕上げ段階において、日本産ウルシは欠かすことの出来ないものである。現在、輪島で使用する国産ウルシのほとんどを移入にたよっているのであるが、国内の産地においては全体として前述したような理由からウルシ樹の栽培は下火になりつつあり、掻工の後継者も育ちにくい状況にある。そこで、今後も輪島漆器業界が高品質の漆器の生産を維持するなら、日本産ウルシの生産は地元で行うべきであろう。現在は移入にたよっているわけであるが、今後も今まで通り移入出来る保障はないからである。

ウルシを効率よく採取するためには、ウルシ樹の生育に適した土壤に植えることと、ある程度以上の集約栽培が求められるのである。つまり、掻工1人が1年に掻き取るウルシ樹の本数は300～400本であり、1日に掻き取る本数は75～100本で、4日で一巡するのである。したがって、1日の工期として75～100本が掻き取れる範囲に栽培されておればよいのであるが、理想としては1集落に400本程度以上栽培することであろう。また、手の届く範囲（1.8m）には枝を付けないように、枝打ちや芽かきなどを行うことが大切である。筆者は平成10年3月に茨城県大子町西金地区におけるウルシ樹の栽培状況を調査したが、畑の周辺、山の裾、道路の斜面、河川淵などウルシ樹の生育可能と思われる所にはほとんど植えられていた。それは古老や掻工経験者から話を聞いた戦前及び戦後昭和30年頃まで、能登地区でウルシ樹が栽培されていた状況を思い描くのにも十分であった。筆者が輪島市内の各集落を今までに回った限りでは、ウルシ樹の植栽適地（可能地）がかなりありそれらは放置状態にある。また、輪島農林総合事務所

管内（5市町村）には耕作を放棄した田畑が850 haにも及んでいるのである。休耕田は、畦畔は勿論のこと本地も水切りを十分することにより、かなりの面積でウルシの栽培が可能になることは前述したとおりである。

次に輪島で毎年1.5 tの国産ウルシを使うとして、必要本数を試算してみる。成木1本から約200 gのウルシが採取できるので毎年殺し掻きに必要本数は（1.5 t ÷ 200 g）7500本となる。成木に達する年数を13年とするなら、13年周期で掻き殺しをすることになるので、97,500本（13 × 7,500）栽培する必要がある。植栽は3 m間隔で、ha当たり約1000本であるから、面積に換算すると約100haとなる。約10万本（100ha）を栽培するだけの条件（面積）は十分に存在するのである。また、一度計画本数を植栽したら、採液後伐採することにより萌芽更新が自然になされるので、新たに植栽する必要はないのである。

因みに石川県林業史によれば、昭和10年頃は毎年約3万本が県内で新植されており、ウルシの生産量は約5 tであった。その大半が輪島とそれに隣接する町村で生産されたのである。

2 三者の協調

ウルシ樹の栽培は、植栽（保育を含む）者、採液者（掻工）、利用者（漆器業者）の三者の協調があつてこそ順調に行われるものと思う。戦前及び戦後でも昭和30年頃まではウルシが高価で取り引きされたため、三者が個々に自分の仕事に取り組んでも問題は生じなかったのである。しかし、現在は前述した様に安い外国産ウルシの輸入で日本産ウルシは価格の上昇が抑制されているのである。今までのように、植栽者は植栽するだけで成木をできるだけ高く買い上げてもらいたい想いで臨み、一方掻工は可能な限り安く買い上げようという想いで臨み、そして漆器業者はウルシが手に入ればよいのであり、植栽や採液については関知せず、という想いで臨むのなら事の成達は困難であろう。三者がよく話し合い、協調して進めることが何よりも大切であると思う。

掻工自身が栽培しているものについては、保育が十分なされており、目の高さまでは枝がついていないものがほとんどであった（大子町の視察及び古い掻工の話）。この意味から、栽培者の中から掻工を育てることは理想であり、前述した三者

の強調を促進することにもなると思う。

V まとめ

昭和46年以降約13万本のウルシ樹が植えられてきた。このうち成功（採液）したものは一部であり、大半が不成功に終わった。不成功の第1の原因はウルシ樹の植栽適地を確認せずに植えたことである。例えば休耕田の本地に十分な水切りをせずに植えたこと、また広葉樹林の中にスギ、アテの拡大造林をする方式で大面積の植栽団地を設定したこと等があげられる。また林地を国営で開墾し、農作物の栽培が不成功に終わった所にウルシ樹を植栽したことは、ウルシ樹の生育特性（生理）を無視した初歩的な誤りであった。

これらの不成功は、ウルシの栽培技術を十分身に付けずに、予算と植栽計画面積をかかげて先走ったことが背景にあったことを強く反省しなければならない。

第2の原因は、保育を十分にしなかったことである。畑地や林地の適地に植栽したものもあったが、保育がなされていないためススキや灌木に被圧されていたり、つる類に巻かれて正常に生育していないものが相当目についた。これはウルシ栽培に対する意識の低さが背景にあるように思う。

今後のウルシ樹の栽培に当たって大切なことは、指導する側（行政）としては植栽適地や生育特性を十分に認識し、誤りのないよう普及指導することである。決して、予算を消化することが先行してはならない。いま一つは栽培者、掻工、漆器業者の三者が協調して事に当たることである。理想としては可能な限り栽培者の中から掻工を育てることであろう。

（附）ウルシ樹栽培の要点

ウルシ樹の生育には土壌が肥沃で、排水が良好であり、かつ水分状態は適潤であること、そして日当たりの良いことが最大の条件である。逆に言えば、やせ地、乾燥地、過湿地や日当たりの悪い所は植栽不適地なのである。

1 植栽適地について

- (イ) 畑地や屋敷の周囲
- (ロ) 川岸や土手斜面
- (ハ) 山すそ（林地では斜面下部）
- (ニ) 休耕田の畦畔

ただし、本地に植える場合は水切りを十分に行うこと。即ち水の流入を止め、かつ雨水が溜まらないように排水口を設ける。水切りをしたのち1～2年後に鍬又はスコップで深さ20cm程度を掘り起こし、以前の不透水層が酸化している（赤褐色を呈している）ことを確認して植栽する。

2 植栽に当たって留意すること

(イ) 林地や山すそ等に団地状にまとまった面積を設定して植えようとするなら、適地以外の場所にも植栽範囲を広げることになる。そうすると今までと同じような不成績地を造成することになるので、植栽は面積の大小にかかわらず、適地だけに限るべきである。

(ロ) 他の樹種との混交をさけることは勿論であるが、ウルシ樹だけを植えても植栽密度が高ければ、成長するにつれて枝葉が互いに接触し、その部分に枯枝が目立ちはじめ。そのまま放置すると、次には固体間に優劣の差が生じ、劣勢なものは被圧されて枯死する。

そのため、ウルシ樹の植栽間隔は約3m。1ha当たり1,000本程度が理想である。

3 手入れについて

(イ) ウルシ樹が草や灌木に被圧されないように

下刈りはていねいに実施すること。

(ロ) 巻きついたフジやクズ等のつる植物は根元から取りはずすこと。

(ハ) 掻き取りの可能な高さまでは芽かきや枝打ちをして幹を1本にすることが大事である。これは採液に当たって効率よくするためであり、売り渡しに当たっても有利である。

4 萌芽更新について

萌芽更新をする場合は、掻き取りの終了した木は速やかに伐採すること。作業の都合で翌春に伐採する場合でも3月中に行うこと。伐採が遅れると萌芽更新が行われなくなる可能性があるからである。

5 苗木の生産について

苗木の生産には実生法と分根法がある。実生法は一度に多量の苗が生産できるも、ウルシ液が多く産出する樹と少量しか産出しない樹が生じる欠点がある。

一方、分根法は手数がかかるも、多く産出する樹から分根することにより、良苗が生産できる。ただし、分根苗は根が一方に片寄るので、斜面に植える時は注意が必要である。